
光り

桜桃 ユメ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光り

【Nコード】

N3687A

【作者名】

桜桃 ユメ

【あらすじ】

光りそんなあたたかなものなかなか届かないもの

一 月夜の少女

月が朧げに見える夜。

池の中央。一人の少女が静寂の中たたずんでいる。少女の悲しげな顔が水面に映る。夜も遅いせいかな池の周りには、人っ子一人いない。辺りには、人工的な明かりはない。だから月以外彼女をてらすものはない。はずだった。しかし彼女の“立って”いる所だけは、光っていた。そのせいかな少女は幻想的に見える。そうまるで絵本から飛び出した妖精のようだ。その光は、ほたるのようだった。いやそれは、まさにほたるそのものだった。だがそれは、池から集まってきたものではなかった。少女の手のひらからひとつまたひとつとできていくものだった。その姿は、さながらマジシャンのようだった。それは、ハトを次から次へとだすように軽やかに出てくる。少女が軽く手を閉じ自分の顔の前に手のひらを持つていく。まぶたをゆっくりと閉じ、手に少し力をいれる。そして手をゆっくりと広げると、雪がゆっくりゆっくり落ちてくるように。そのほたるたちは、少女の手のひらから少女の足元へと落ちていく。一回で出せる量が決まっているのかしばらくすると、同じ動作を繰り返す。少女の足元に落ちていき、雪が積もるようにダンダンと重なっていく。そして一定量集まると、ほたるたちは、大きさと光りをまし少女の周囲を自由に飛び始める。まとまりのなかったほたるたちは、次第に少女の体を覆うようにあつまりだす。まるで光のかべを少女の周りに作るかのよう……。あと少しで少女が光のかべで覆われそうというとき、少女は、小さな声でそれでいてはつきりと発音して

「始まる。そして終わりにしよう」

といった。その瞬間、強力なプレシャーが辺りを覆いつくした。そして周りにあった木々を押し倒して何かが少女に向かって迫ってきた。それは、波動のようなものだった。風が切り付けるかまいたちによく似ていた。ただ破壊力はその比ではなかった。押した倒さ

れた木々が物語っていた。とうとう少女の体全体が光りに覆われた。その次の瞬間それは、少女を覆いつくした光に衝突した…。そしてほたるたちが四方に飛び散った。するともうそこには、少女のすがたはなかった……

二 転校生

キンコンカンコン

「おーいお前ら席に着け。かねなつたぞ!!」

と怒鳴りながら先生が入ってくる。がしかし生徒は、先生のことなど露知らずといった感じでおしゃべりに夢中である。しばらくたつてもおしゃべりはとまらなかった。しびれを切らした先生は…

「転校生が着たんだ。早く座れ!!」

今度は、少し強い口調で言う。生徒達はというと転校生と聞いてざわめきがいそう強くなっている。

「転校生かどんなやつかな」

「きつとかわいい女の子じゃないか」

などと期待満点の様子である。

「早く席に着け!! 転校生に入ってもらえないだろうか」

そろそろ先生の機嫌が悪くなってきたので生徒達は、しづしづ各自の席に向かい座る。それを見て先生は機嫌を直し

「よし転校生を紹介しよう!! さあ火向光さんはいって」

と言って出入り口のほうを向きいった。

生徒達は出入り口にいつせいに目を向ける。

みんなが期待をよせているのだ。

まだ幼さが抜けきっていない少女が入ってきた。

教室の一同は、一瞬時間が止まったかのように少女に見入っていた。それは、少女がかわいいからというだけではなかった。何か不思議と見せられている。そんな変わった雰囲気は少女にはあった。おずおずとした表情で少女は先生のとなりに移動した。そして前を向ききよとした目で教室の生徒達を見やる。教室にいる生徒一同がまるで時間がとまっているかのようにぼうつと自分をみているからだ。

「さあ自己紹介して」

先生の声がまるで合図だったかのように生徒達は動き出した。すると少女は恥ずかしいのか下を向いてしまった。しばらく間があき覚悟ができたのか少女はいきなり話し始めた。

「えっと！！私は、火向光です。よろしく願いします」

ちょこんと頭を下げる彼女は妙に愛らしかった。

それが僕の光に対する最初の印象だった。

彼女はすぐにクラスの人気者になりクラスになじんでいった。

彼女が転向してきてからの日々はあっという間に過ぎていった。

そんな平和な日々が続いていた。

いつまでも続く日常。

平和な日常。

そんな日常が当たり前だと思っていた。

でもいつまでも変わらないものではなかった。

些細な出来事で壊れてしまうものだった。

人は始めてそれが壊れて気づくものなのだろう。

僕がそうだったように…単調でつまらない日常。

先が見えている繰り返し返される日常。

よく自分でそう言っていた。

でもいざそれが壊れてしまうとそんな日常でもよかったとおもえる。そうつまらなくてもいい、日常が一番いい。そんな日々のなかでもその人の生き方なりやり方なりでいくらかでもかわる。楽しみだってみつけることができる。そうした考えが僕にもあれば…自分のすべてを受け止められる自分が入れば、こんなことはおこらなかつたのだろう…

三 得体の知れないもの

「危ない」

そんなふうに分つてはいつたのがいけなかった。平穩無事を祈つて遠くから見たいればよかった。でも僕にはそんなことができなかった。

考えるよりもはやく体が動き出していた。

その得体の知れないものの攻撃から光を守るために……。その得体の知れないというものは、真つ黒い塊だった。

人とか生き物という風には、感じなかった。

というより生きているという気がしなかった。

そいつらが出てきたとき辺りに少しずつ闇が広がってきた。まるでそいつらが引き連れてきたかのように。

同時に冷たい空気も漂ってきた。

最初は気のせいだと思った。

現実になんなものが存在するなどありえない。

僕のなかにある常識がそうたいかけていた。

がそれが間違いだとすぐに思った。

実際にある威圧感・恐怖それらがすべてを物語っていた。

もはやおぼけとか怪物とかいった類のものとはレベルが違う。

冗談まじりのそんな話とは違う。

何かにつけて押し掛かつてくる重圧がそうたいかけていた。

そしてなによりもそいつらの引き連れてきた闇によって辺りが暗闇にされた。

もはや疑う余地は残ってなかった。

そしてそいつらは、あきらかな敵意を持って光を狙っていた。

目がどこにあるかわからないが光を取り囲むように集まっていく。

光は、そいつらに囲まれても怖がらないようだった。

僕の目がおかしくなったのか光の回りが本物の”光”に覆われてい

くようにみえた。

辺りに広がった闇や冷たさは、その光に触れて消えていく。

温もり暖かさ何か心を揺さぶられるような光だ。

じわじわと黒い塊が光に向かって近づいていく。

その中の一匹が光に向かって飛び掛かった。

そのときだった。

僕は光に向かってくる黒い物体にむかって僕は飛び掛かったのは、
がしかし僕の体当たりは、むなしく空を切った。

あつたはずの存在。

触れるはずだった存在。

その存在は、彼女の回りにある光りに触れると同時に消えてしまっ
た。

なぜ消えたのだろうか僕にはわからなかった。

「君：どうして」

彼女は、かなり啞然としていた。

途中で言葉は終わってしまった。

が続きははっきりと分かる。

ここにいるのだ。

ここにいる理由。

それを聞かれると困るので僕は、先手をうって話し掛けた

「あいつら一体なんなんだ??」

「えっ」

彼女は、さらに不意をつかれたようだった。

「それは…危ない」

話に気を取られていた。

後ろから迫ってくるあの得体の知れないものに気が付かなかった。

振り向いたらもう目と鼻の先にそいつはいた。

がそいつが僕に当たったと思った瞬間またそいつは、消えてしまっ
た。

彼女の回りに漂っている光に掻き消されたように。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3687a/>

光り

2011年1月1日14時34分発行